

一体、俺は何をやっているんだろう。

親友の部屋で浣腸を眺めながら、物思いに耽る。

ことの発端は数時間前。

映画を見に行く約束をしていたのだが、優希から『ごめん。今日行けなくなった』とだけ急遽連絡が入った。

優希とは俺の親友で、男らしい中身の割に外見は綺麗な顔立ちをした中性的なイケメンだ。

そんな優希とは小学校時代からの仲になる。

優希は、今日の映画を俺よりも楽しみにしていたはずだった。

なんせずっと好きだった漫画が映画化されて、珍しく子供のよう
に喜んでいたのでから。

そもそも誘ってきたのも優希の方で、数日前から「忘れんな
よ！」と釘を刺されていた。

そんな優希がドタキャンするなんて何事だと不思議に思う。

俺は真相を確かめるべく、コンビニで適当に飲み物やお菓子を
買って、優希が一人暮らしをしているマンションを訪ねることにし
た。

ピンポンとインターホンを鳴らすと、玄関のドアが開く。

「はいい……って、しょ、翔太……！ どうしたんだよ！」

「どうしたはこっちの台詞だよ。いきなりドタキャンするから何事か
と思ったよ。なに、体調不良？」

「……いや、まあ……そんなようなもん……でも大したことない！
だ、大丈夫だから」

なんとも歯切れの悪い返事だ。

しかし、明るいライトの下でよく見ると、優希の顔色が悪いのも
事実だった。

「本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫だって」

「でも、顔色すげえ悪いし」

「大丈夫、だから……」

弱々しく「大丈夫」と言い続ける優希に大丈夫じゃないだろうと内心思うが、これ以上は何も聞かないでくれと心の声が漏れてるので、俺も何も言わない。

とりあえず、「お菓子とジュースあるからこれ置いたら帰るわ」と、いつものように優希の家に上がる。

優希は「あー……悪いな」と後ろをついてきた。

しかしリビングのドアを開けた瞬間、優希は何かを思い出したかのようにハッとして、「入るな！」と瞬時に叫んだ。

しかし、その声は一步遅かった。

「何これ」

見てはいけないものを見てしまったと感じ、思わず顔を引き攣らせてしまった。

リビングの上には、【浣腸】と書かれた箱が置いてあった。

「あっ……それは……」

隣で優希が涙目になっている。

——浣腸？

浣腸ってあの浣腸か？

なんでそれが優希の家に……？

頭の中が疑問でいっぱいの俺は、口には出さずとも困惑が顔に出ていたのだろう。

優希がおずおずと口を開いた。

「……俺、結構重度、の……便秘、なんだ」

「え、……あ、そうなんだ」

申し訳ないが、至ってシンプルな返答しかできなかった。

だってまさか、親友から便秘だと告白をされるなんて。

……何これどんな状況？

「それで、今日もその、ずっと出てなくて……腹がパンパンでしんどくてさ……だから映画も行けそうになくて、ドタキャンして悪かった」

「あ、あー……そういうことならしょうがねえよ、うん……」

予想外すぎる理由にどんな反応をして良いか分からず気まずい空気が流れる。

だって映画ドタキャンされた理由が便秘でうんこ出ないからだなんて、普通思わないだろう。

優希は相当恥ずかしいらしく、先程まで青白かった顔が今は真っ赤だ。

俯きながら喋る優希は、いつもよりも声が小さい。

.....なんかごめん。

「あー、それで浣腸.....とかするんだ。大変だな」

「いや.....浣腸は初めてなんだけど.....俺不器用だし慣れてないから自分じゃ上手く入れらんなくて、さっき一つ失敗しちゃってさ.....また次も失敗しそうだから、もう自然に出てくるのを待とうかなって.....」

「.....つーかそんな状況なら普通に病院に行けよ」

「恥ずかしくて嫌だ」

即答で返ってきた返事に子供かよと思う。

そもそも、不器用だから失敗したと言っているけど、そんなに浣腸って難しいものなのか？

まあ確かに優希は不器用な方だけど。

ただケツに入れば良いだけだろ？

「……じゃあ俺が入れてやろうか？」

「……はあ？」

優希からは素っ頓狂な声が返ってくる。

しかし、俺は至って真面目だった。

親友が苦しんでいるなら助けてやりたいのは当然だろう。

楽になれば今から映画にも行けるかもしれない。

何より、優希のそんな辛そうな顔は見たくない。笑っていてほしい。

「俺が浣腸入れてやるから、下脱げよ」

「い、いやいやいやいやいや、なんで翔太に浣腸されなきゃなんねーんだよ！ 馬鹿か！」

「だって辛いんだろ？ その浣腸入れれば楽になるんだろ？
だったらやってやるよ」

「無理に決まってるんだろ！ 絶対にやだ！ 変態かテメェ！」

「大丈夫だって。俺、一回り離れた弟いるけど、弟が熱出した時
座薬入れてやったことあるし」

「そういう問題じゃないんだけど！」

優希は頑なに拒否するが、俺は一時の恥じよりも体調回復の方が優先だと思う。

俺にケツを見せるのは一瞬で終わるが、体調不良は続くのだから。

「でも、病院行きたくないなら浣腸するしかないんだろ？」

「そ、そうだけど……」

「別に男のケツ見てもなんとも思わねえから。それよりお前が苦しそうな顔してる方が見てて辛いし」

「うっ……さらっとカッコいいことを言うな！」

「大丈夫、傷つかないように優しく入れるから」

「そういう問題じゃねえんだよ！」

そんなやり取りをしつつ、本当に辛いのだろう。優希の顔色は悪く、ずっと腹を押さえている。

「ほら、腹、辛いんだろ？」

「……」

「早く楽になった方がいいって。さっきから顔色が悪い」

そう促せば、優希は唇を噛み締めて俯く。

親友に浣腸をしてもらう羞恥と、早く楽になりたい気持ちが入り混じって、葛藤で心が揺らいでいるのだろう。

「……じゃあ、お願いします」

優希は覚悟を決めたのか、俯きながら承諾をした。



ベッドの上にバスタオルを何枚か敷いて、万が一汚れてもいいようにした。

優希はシャワーを浴びてケツを洗ってきて、上はTシャツ、下は何も身に纏わない姿で四つん這いになっている。

俺は優希のケツを前に、浣腸の箱を開けている。

やり方の説明を一通り読んで、なるほどこのノズルのような部分を肛門に挿入して、中の液体を注入するのかと確認していた。

「ううう……恥ずかしすぎる……」

優希から泣き言が聞こえた。

それもそうか。

室内の電気は付いていないが、昼間なので電気を消したとてたかが知れている。

普通に丸見えだ。

優希は小刻みに震えていて、相当恥ずかしいのが見受けられる。

——これは優希のためにもサクッと終わらせた方がいいだろう。

そう思った俺は、優希の尻に視線を向けた。

.....なんか小ぶりの可愛い尻だな。

男のくせに綺麗な尻をしてると感心してしまう。

顔が綺麗な男は尻まで綺麗なのか。

「じゃあ始めるな」

「.....う、ん」

珍しく今にも消え入りそうな優希の声を合図に、俺はそっと優希の尻に触れた。

しかし、優希は緊張してかぎゅっと力を入れていて、尻肉が左右に開けない。

これでは注入どころか穴すら見えない状態だ。

「優希、力抜けって」

「だ、だってえ……」

「これじゃあいつまで経っても入れらんない。恥ずかしい時間が長引くだけだぞ」

「うう……」

「大丈夫だから。すぐ終わらせるから」

優しくそう言うと、優希は観念したのか体の力をそっと抜いた。

俺はもう一度優希の尻肉に手を添えて、左右にゆっくりと開けば、普段は隠れた奥まった窄みが露わになる。

「……」

思わず、感嘆の声が漏れそうになるのを寸でのところで抑えられた自分を褒めたいと思った。

男の尻なんて見たところで何も感じないと思っていたのに、正直、優希の尻穴があまりに綺麗で驚いてしまった。

綺麗というか、可憐……？

小さなアナルは、形が崩れることなくきゅっと窄まり、整っていた。

男のアナルなんて、もっと汚いと思っていたのに、なんていうか、お手本のようなアナルの形をしていた。

丁度良いバランスで刻まれた皺は短く、くすみは薄く、桜の蕾のようだった。

恥ずかしさからかふるふると震える穴が可愛らしくて、思わず撫ぜたくなるほどだ。

全くのピンク色というわけではないけれど、薄茶色にも桃色にも見えるアナルは、優希の白い肌によく映えていて、艶かしかった。

元々華奢でどこもかしこも綺麗な造りをしていると思っていたけれど、ここまでだとは思わなかった。

失礼なのは百も承知だが、元カノのアナルよりも全然綺麗だ。

俺は思わずゴクリと生唾を飲む。

やっべ。普通に勃ってきたかしんない。

「……翔太？」

何も言わない俺に不安になったのだろう。優希が恐る恐ると言った感じで声をかけてきた。

「え、あ、ああ……じゃあ入れるな」

「早くしろ……死ぬほど恥ずかしいんだからなあ……」

「ごめんって」

気を取り直して、俺は浣腸を手にとると、今度は片手の指と指で尻肉を左右に開いた。穴の皺が伸びて、窄まっていた穴が『く
にい♡』と小さく開いて、変な気分になる。

そもそも尻穴をこんなじっくり見たことが初めてだった。

つか、なんかヒクヒクしてないか？

やばい。普通に触ってみたい。

——ちゅぷ♡

「んっ……」

誘われるがまま、小さすぎて穴とも言えない窄まりの中心部に、ノズルの先端を挿入すると、優希から艶かしい吐息が漏れる。

優希の体がふるふると震えているが、ここまできたら一思いにやった方がいいだろう。

ちゃんと中に液体が入るよう、『くくっ』と少し先に進めて、容器をゆっくり押しつぶした。

——ちゅううう、びゅっ、

生々しい音を立てて、優希の体内に液体が注入される。

優希は耐えるように枕に顔を埋めているので、どんな顔をしているのかは分からない。

なんとなく、残念だなと思った。どんな顔をしているのか見たかった。

俺は優希のアナルから目を逸らせずに、小さな穴に浣腸のノズルが入っている様子を眺める。

親友にこんなことを思うのは間違っていると分かるが、めちゃくちゃにえろい。アナルに興味はないはずなのに、尻の穴ってこんなにえろいんだと実感する。

本人も頑張って意識してるんだと思うけど、自分自身の力では制御できないのだろう。

時折、ひくっと小さな穴が蠢いて、それが卑猥すぎて眩暈がした。

——もっと、見てたい。

そんな邪な感情が頭の中を支配する。

でも、ずっとこのままにいるわけにもいかず「全部入ったから抜くな。中の液が漏れないように力入れとけよ」と俺が言うと、優希はこくこくと枕に顔を埋めたまま頷いた。

優希のアナルからゆっくりと浣腸のノズルを抜く。

『ちゅぽっ♡』と卑猥な音がやけに響いて、抜けた瞬間に穴がきゅううう♡と再び窄まった。

——うつつっわ。

アナルえっろ。

中の液体が、少量だけ収まりきれずに穴から『ぴゅっ♡』と吹き出したかと思ったら、『つー……』と蟻の門渡りに伝う。

なんていうエロさだ。俺のちんこはギンギンに勃起していた。

「優希、大丈夫か？」

「ん、もうすでにお腹、やばいかも」

「出るのか？ でも暫く我慢した方がいいって書いてあるぞ」

「流石にここで出しちゃうのは嫌だから、トイレでギリギリまで我慢するよ」

それもそうか。

流石に俺にそこまで見られるのは嫌に決まってるよなと納得して、よろよろと部屋から出ていく優希を見送った。あいにく顔はよく見えなくて、どんな表情しているのかは分からなかった。

俺も俺で、優希が帰ってきた時にどんな顔をして迎えればいいのか分からない。

男のケツなんて見てもなんてことないと、軽く言っていたのに。

「……どうすんだよ、これ」

鎮まりそうにない自分のちんこに、俺は複雑な思いを抱えていた。

親友に対して勃起してしまった罪悪感。

でもそれ以上に興奮が治まらず、こんなにドキドキするのは初めてだと思う。

元カノで童貞卒業した時ですらこんなに興奮しなかった。俺ってそっちの気質があったのだろうか。ため息が出る。

流石に優希の部屋で抜くわけにはいかないし、俺はあえて萎えそうなことを考えることにした。



.....やばい。全然勃起がおさまらない。

あれから数十分経つと言うのに、俺のちんこはビンビンのままだった。

萎えることを考えようと、数学のハゲ教師のことや、先週のテストのこと、昨日テレビで見たお笑い芸人のことなど極力性とは結びつかないことを必死に考えるも、どうしても頭の中で先ほどの優希の可憐なアナルがチラついて離れない。

だって普通にもう一回見たいし、なんなら触りたかった。

そんな欲求まで湧き出てもうダメだ。

ていうか優希戻るの遅いけど大丈夫かな、様子見に行ったほうがいいかなと思ってると、ガチャッとドアが開く。

「優希.....！ お、帰り。どうだった？ 大丈夫か？」

「あ、ただいま.....。うん。お陰様ですっきりしたよ。全部出たみたいで、楽になった。ありがと」

今度はちゃんと下までルームウェアを着た優希が、お腹をさすさすと撫でながら入ってきた。顔色は先程とは打って変わって良くて、ほっと安心する。

俺は、勃起を悟られないよう、内股気味でベッドに座っていると、優希も俺の隣に腰掛けた。

ボディソープの良い香りがして、ますますヤバくなる。

「あのさ」

「お、おう」

「なんかごめん。こんなことさせて」

「えっ、いや、俺がやるって言ったことだし」

「でも、嫌だっただろ。翔太は優しいから、俺が苦しんでたら嫌な素振りせずにやりたくないこともやってくれたけどさ……本当、ごめん」

優希の視線は膝の上でぎゅっと握られた拳に向けられていて、俺の方を見ようとしない。そんな優希の手がカタカタと小刻みに震えていた。

「男の尻の穴見るとか、嫌だったよな。ましてや浣腸してもらうとか、なんかほんと……」

グスツと鼻を吸る優希は罪悪感でいっぱいなようで、俺の方が
申し訳なくなる。

最初にやると決めたのは俺だし、強引に進めたのも俺なのに。

「嫌じゃねえよ、別に」

「んな強がらんなくていいって」

「強がってないから！ 優希が気にする必要ないし、寧ろ俺こそ
ごめん」

「なんで翔太が謝るんだよ……俺、本当に翔太に合わせる顔な
い」

だからさっきから俺の顔を見てくれないのか。

俺は、苦しむ優希を見たくなかったただけなのに。そんな風に、優
希を追い詰めたかったわけじゃないのに——……

「っ、！ほんと、嫌じゃなかったから！ その証拠に俺、勃起し
てるから！」

「……は？」

——終わった。

どさくさに紛れて何を口走っているんだ俺は。

優希はポカンと口を開けて俺の顔を見ていた。

「ぼ、勃起？？ 翔太が？？」

「う……いや、その、」

「じゃあ、見せて」

「は？？」

「俺ばっかり見せてんのずるい……」

「ずるいって、おまえ……」

「見せれないってことは嘘なんだろう……俺を励ますための」

「なんでだよ」

そんな嘘ついてどうすんだよ、と俺はため息を吐き、こうなったら仕方ないと、内股気味で閉じていた足を開いた。

未だ勃起したちんこは、ズボン越しでも勃起あがっていることがわかるほど、天井に向かって上を向いていた。

「……っ」

優希は顔を真っ赤にして、俺の勃起してるちんこをガン見している。

「……見んなよ、恥ずかしい」

「……俺のもっと恥ずかしい場所、見たくせに？」

……それはそうだ。

ズボン越しの勃起ちんこなんて、肛門に比べれば大したことはないだろう。

「そういうこと言うなよ、思い出すからもっとおさまらなくなる」

「思い出す？」

「……優希の尻の穴。……アナル」

「あ、アナルって言うなあ！」

「あーもう、どうすんだよ。ますますちんこおさまらねえ……悪いけど、トイレで抜いてきていい？」

「……え」

勃起すぎて痛い。

ムラムラしてきてやばいから一回発散したい。

そうでなくては優希相手に取り返しのつかないことをしてしまいそうで怖かった。

俺はなるべく優希と顔を合わせないように言った。

「お、おかずとか、あんの……？」

それなのに、優希は何を言っているんだろう。

「……は？」

「だって、それ俺のせいなんだろう……？　なんか悪い気がして、きて……トイレで抜けんのかなって……」

語尾がゴニョゴニョと尻すぼみになる優希は、顔を真っ赤にして俯いた。自分でもおかしいことを言っている自覚はあるのだろう。

「何、じゃあ優希がおかずになってくれるの？」

俺はあえて茶化すように言った。

これで優希が「冗談だよ」と笑ってくれれば、これで終わりにするつもりだった。

「……」

でも、優希は無言だった。

その代わり、真っ赤に染まった頬と、遠慮がちに俺を見上げる瞳が、その先をねだっているようで、俺は思わずゴクリと喉を鳴らしてしまった。

もう、どうにでもなってしまえ。



先程と同じように、優希はベッドの上で四つん這いになっている。

しかし先程と違うのは、優希はもう嫌だと拒むことはなかった。
今の優希は俺に自ら尻を突き出した状態でぎゅっとシーツを握っている。

優希の白い綺麗な尻に見惚れてしまうが、早くその先を暴きたくて、そっと優希の尻に手を添える。

吸い付くように柔らかい尻。

今度は尻に力を入れてないので、左右に開くと、簡単に可憐な蕾が晒け出された。

「えっろ……」

もう我慢する必要はないと思うと、自然と口に出てしまっていた。

「……本当に？ き、汚くねえ？」

「いや、すげー綺麗だよ。穴はピンク色だし、小さいし、形も崩れてなくてきゅっと窄まってるし、優希は体毛が薄いからかケツ毛の一本も生えてないし、女より綺麗な肛門してるぞ。しかも時折恥ずかしげにヒクヒクすんのが可愛くて……」

「ば、ばか！ もういいから！ 恥ずかしいから言うのやめろ！」

「あ、アナル褒めたらもっとヒクついた。優希のアナルは正直だな」

「っ！ 死ね！ 変態！ きもい！」

顔を真っ赤に染めた優希は悪態をつくけど、ただ恥じらってるだけだと分かるので可愛いものだ。

そんなヒクヒクアナルを目の前にして、我慢ができなくなる。

「触っていい？」

そう聞くと、優希は大人しくなりこくと頷いた。

素直になれないだけで、本当は期待しているのだろう。

俺は、皺が集まった中心に人差し指を添えた。

ざらざらした感触。これが肛門の手触り。

——きゅんっ♡

「っ……ん、♡」

優希のくぐもった声が漏れる。

恥ずかしそうに、慎ましげに窄んだ穴に、ゾクゾクと背徳感を抱いた。

指の腹でグリグリと窄みを擦ると、きゅっきゅっ指に吸い付いて、はくはくと食んでくる。

——これはやらしくてエロい穴だ。

しかし吸い付きが強すぎて、簡単には中に侵入させてくれそうにない。

でも、なんとかして指を入れてみたい。

こんなエッチな穴を目前にして、見てるだけなんて耐えられない。

そのためには、ひたすら穴を解すしかないのだろう。

「っ、んっ、んんっ……ふっ、ん♡」

「やらしい声」

「だっ、て……♡、そんな触り方、するからあ……♡」

「だって、優希のアナル、小さいしか弱そうだから、優しく触ってやんなきゃ壊れそうで……あー……指、入んねえかな……」

穴を指でくにと引っ張ってみる。

「てめっ……！ 広げんなあっ……！」

隠れたアナルの内側のピンク色の媚肉が晒け出された。

優希の制止の訴えなどお構いなしに、晒け出された媚肉をぶにぶに触る。

「アっ、ンっ！！！！♡♡♡」

柔らかくて気持ちいい。

やはりこれだけでは物足りたない。

どうしても、ナカの具合を確かめてみたかった。

一体、優希のナカはどんな感じなのだろう。

締め付けは？ どれほどのキツさ？ ナカの温もりは？ ナカはどんな形をしてる？ アナルに指を入れたら優希はどんな反

応をするんだろう？ 痛がる？ それとも快樂に善がるのだからか？

今の俺には、優希のアナルに指を入れることしか頭になかった。

流石にこのまま指を入れるわけにはいけないので、湿らせないと入らないだろう。

それなら、方法は一つ――。

躊躇いすらなかった。

俺は指を離し、優希の尻に顔を埋めた。

スン、と鼻を鳴らす。

決して臭いわけではなかった。

寧ろ肛門なのに臭くない方だと感じる。

それでも、全くの無臭というわけではなくて、先程綺麗に洗ったからか石鹸の香りと、ほのかに優希のやらしい香りが混ざって、ふわっと鼻腔をくすぐる。

顔が綺麗でアナルの形まで綺麗な優希でも、少なからずアナルは臭うんだと思うと、興奮が更に増し、俺の股間が膨張した。

「ひゃ、うっ……！！ へっ、やっ、な、にして……！！」

自分の尻に顔を埋められていると分かった優希は後ろを振り返り、逃れようと腰を振った。

それを許さないと腰を鷲掴みにし、穴の中心に舌を添える。逃がさない。

「や、あああっ……！ やだやだっ、そんなとこ汚いから……！」

まず初めに、窄まりをべろんっと一舐めする。

「ひ、いっ♡♡♡」

それから、犬のようにベロベロと舐める。平坦ではなく、ざらざらした肛門特有の皺の感覚に、本当に優希の尻の穴を舐めているんだなと思うと更に興奮する。

「あああっ……！ ♡、んんっ♡♡♡♡♡」

次に舌先を尖らせて、ツンツンと穴をノックする。

舌で味わうアナルのヒクヒク具合は、また指で味わった時と違う感覚がする。

指の時は、指の腹に吸い付く感じだったが、舌だと中に侵入を拒むように押し出される感覚だった。

でも、そんなの関係ない。

優希の小さい穴をこじ開けるように、舌の先を振じ込む。

「あ、うづっ.....♡♡♡♡、だ、めえ.....っ！♡♡、きたな、いつ♡♡♡、
そんなとこ、舌っ、いれないでっ.....♡♡♡♡」

本来なら優希の一生誰も許すことのなかったであろう排泄器官。

出ることしか使い道がなかった肛門に舌を入れていると思うと、背徳感がやばかった。

俺は今、親友のアナル舐めをしている。

もっと奥へ辿り着きたくて、舌を更に突き入れる。

きゅうきゅう締め付ける穴が愛おしい。

浅い部分を何度も何度も突き刺すと、もう優希は抵抗しなかった。というか、抵抗する余裕さえないのだと思う。

「あああっ♡♡♡、あああっ♡、やだっ♡♡♡、なにこれえっ.....！
♡♡♡♡」

優希の声はどんどん甘い声に変わっていき、長年親友をやっていた俺も聞いたことのない声に、優越感を抱く。

甘くなる声に比例して、はくはくと解れていくアナル。

先程はきつくて何も入らなそうだった穴が、どんどん柔らかくなっていく事実、に、恍惚とした。

「あああああ`っ♡♡♡♡、ひいいい`ん`っ♡♡♡♡」

ひたすら舌を振じ込み続けると、舌を食いちぎられてしまいそうなほど、締め付けられる。

それでも肛門括約筋の威力に負けないように、穴をこじ開けるように、舌ドリルで突き進む。

「いやあああ`あ`あ`♡♡♡♡♡♡」

肛門内をひたすら舌でぐりぐりすると、優希からは悲鳴にも似た甘い声がひっきりなしに漏れる。

次第に柔らかくなっていく内部。

これなら指くらい入るかもしれない。

——ちゅぽっ♡♡♡♡♡♡

わざといやらしい音を立てて舌を抜く。